地誌研年報 3 号, 1993年 3 月
ANREG 3, March 1993

# アユタヤのイスラム共同体

今 永 清 二*

## Muslim Communities in Ayutthaya

Seiji IMANAGA*

**Abstract** It is generally accepted that Muslims played an important role in the history of Ayutthaya Dynasty. Several studies have been carried out on this topic by using historical documments and materiales. In this article, however, the author try to examine the historical development and the religious social changes of Muslim communities in Ayutthaya by identifing the existing Muslim communities through our field research of Ayutthaya in 1992. As the result of this field research, twenty four Muslim communities have been identified in Ayutthaya,and at present time among them twenty one Muslim communities still exist. The old Muslim communities which were established by Persian, Indian, and Cham Muslims in Ayutthaya period had been abandoned since 1767 when the inhabitants of Ayutthaya had fled away. However the Muslim communities in Ayutthaya revived in the period of Ratanakosin Dynasty when King Rama I and Rama III brought Malay Muslims as prisoners of war and slaves to the Central Thailand. Those Malay Muslim were especially arranged to settle in the old Muslim communities in Ayutthaya,and that caused mixture of Malay Muslim with the other ethnic Muslim groups. At present time the majority of the Muslim in Ayutthaya are Malay Muslim. Beside them, there are few Persian, Pakistan, Indian, and Cham Muslim staying in Ayutthaya. On the other hand among the Muslim communities of Ayutthaya there are segregation of Muslim communities and survival or revival of the Sufism. In this article the author would like to introduce these phenomena of the Muslim communities in Ayutthaya.

目　　次

I. 調査の概要
II. アユタヤにおけるイスラム共同体の発達
III. イスラム共同体の拡大及び新しい共同体の分立
IV. イスラム神秘主義の再生
V. おわりに

* 広島大学文学部 ;Faculty of Letters, Hiroshima University

## Ⅰ．調査の概要

筆者は1992年7月2日～9月3日の間，文部省科学研究費の交付を受け，国際研究（学術研究）「チャオプラヤ川流域のタイ・イスラム社会の研究」を担当し，アユタヤ及びバンコクを中心に所謂タイ・イスラム社会の現地調査を行った。特にアユタヤのイスラム共同体の調査に重点を置いたが，これは，アユタヤが15世紀以来港市国家として発展を遂げ，イスラム教徒が重要な役割を演じたこともあるが，現在もなおアユタヤ城市の周辺地域に実に21ヶ所のイスラム共同体が存在し，イスラム教徒がタイ人としてアユタヤで活動しているため，そのイスラム共同体の実態を明らかにするという学術的関心によるものである。

したがって，アユタヤにおけるイスラム共同体調査の目的を要約すれば，次の二点になる。

1）アユタヤのタイ・イスラム社会の来歴と実態の調査。

2）タイ・イスラムの存在形態の解明。

さて，港市国家アユタヤは，中国とインド及び西アジアを結ぶ東西貿易の中継市場としての役割を果たし，国際都市として発展を遂げた。同時に，チャオプラヤ川とパーサック川の合流点に位置するアユタヤには，後背地の北タイ及び東北タイから豊かな森林生産物がもたらされ，またチャオプラヤ川流域からは米が大量にもたらされた。15世紀のポルトガル人トメ・ピレスの『東方諸国記』（Tome Pires, Suma Oriental）によれば，シアン，すなわちアユタヤには大量の米が集まり，毎年，20～30隻ものジャンクがこの米をマラッカに運搬していたと記している。チャオプラヤ川古デルタで生産された米の余剰は多量かつ安価であり，アユタヤに集まった米は中国はじめ海外市場での米の需要に応えることができた。加えてアユタヤは，海外において需要の大きい多種多様な森林資源を調達することも容易であり，国際的中継市場としての地位を確保することができた。17世紀，ペルシアからアユタヤに渡来したムハンマド・イブン・イブラヒム（Muhammad ibn Ibrahim）の『スレイマンの船』（The Ship of Sulaiman）によれば，アユタヤを称して「船の町」（Shahr-e-Nav）とよんでいる。

したがって，アユタヤ王朝が委託貿易政策をとったこともあって，アユタヤには諸外国の使節や商人が往来し，多くの外国人が住みついて，ここに国際色豊かな都市が形成されたのである（図1，図2）。

トメ・ピレスによれば，アユタヤには「アラビア人，ペルシア人，ベンガラ人，沢山のケリン人，シナ人，その他の国の人がいる」と記している。また，ルイ14世によって派遣された使節の随員ド・ショワジ（de Choisy）によれば，アユタヤには実に43ヶ国の人々

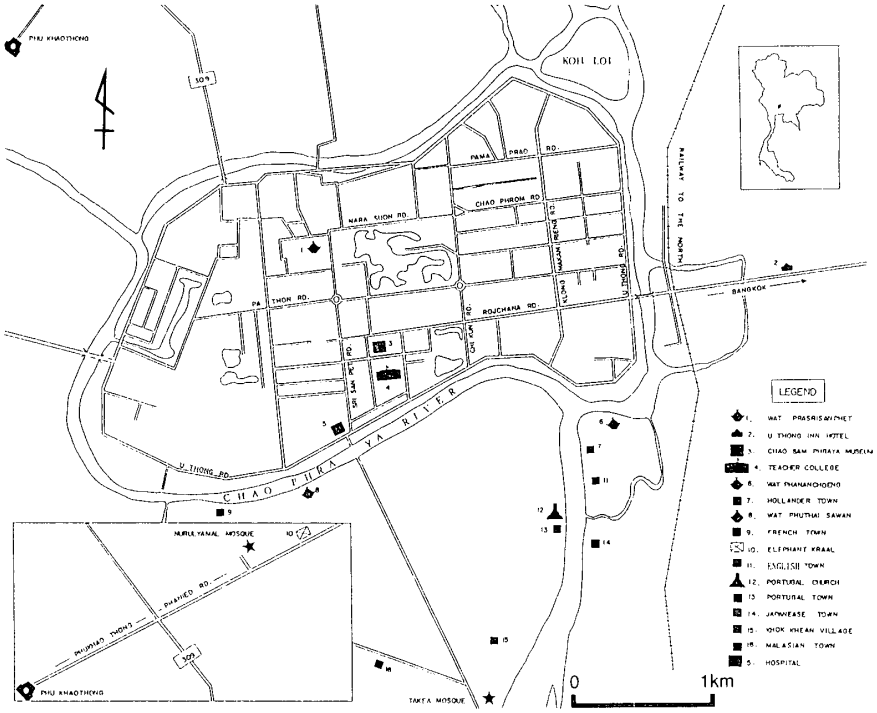
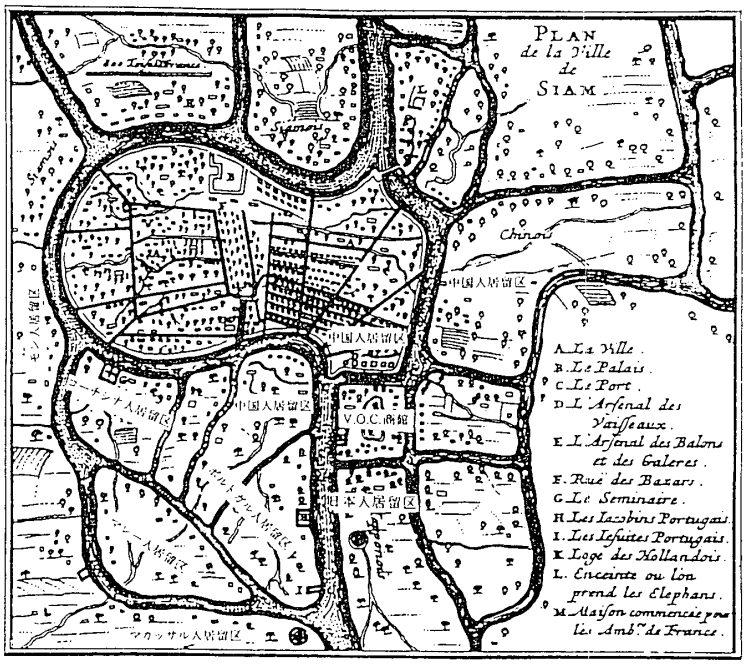



図１　アユタヤ全図




出典：Simon de la Loubère. *The Kingdom of Siam*. Singapore : O. U. P., 1986

図２　アヤタヤ市街図と外国人居留区〔石井米雄（1992）より〕

がいたと旅行記のなかに記述している。これらの中には日本人もいたわけで，岩生成一博士の推定では，1630年日本人焼打ち事件以前の人口は1000～1500人としている。

これら外国人は，アユタヤとその周辺に居留地をあたえられていたが，これら外国人中イスラム教徒の占める位置はかなり大きかったようである。

アユタヤ王朝の通事職は，イギリス通事，フランス通事，オランダ通事，唐通事などの他，ケーク所轄の部局に4人の通事のいたことが『三印法典』所収の「文官位階田表」に記されているというが，ケーク（khaek）とは西方イスラム諸国，またペルシアやインド系イスラム教徒を指すタイ語である。イスラム通事4人の存在は，西方イスラム教徒がアユタヤ王朝において占めた重要性を如実に物語るものであり，事実，アユタヤ王朝の二部門からなる国際貿易担当の一部局クロム・ター・クワ（Krom Tha Kwa）は，ペルシア系イスラム教徒の所管の下にあった。他の一部局クロム・ター・サイ（Krom Tha Sai）は中国人の所管に関わるものであった。こうしたアユタヤ王朝の国際貿易，さらには外交・内政において重要な役割を果たした人物は，1602年アユタヤに渡来したペルシアのコム出身のシェイク・アフマド（Sheik Ahmad，？～1659）である。彼はナレスエン王，エガトソロト王，ソン・タム王，ナライ王の諸王に仕えて，大蔵大臣（Chao Phra Phraklang），内務大臣（Chao Phra Krommatha）に就任し，最後は名誉国務大臣（Chao Phya Boworn Rajnayok）として国政にも参画したが，一方香料貿易をも手広く商っていた。また彼は，イスラム共同体の長としての地位を公認され，初代のチュラーチャモントリ（Phya Chularajmontri，イスラムの王の意）と称することを許された。言うまでもなく，チュラーチャモントリは欽賜名である。

これらペルシア系イスラム教徒は，後述のごとくアユタヤ市内に2ヶ所の土地を下賜されて居住したが，チャオプラヤ川とクロン・マウンの交錯する一帯には，ペルシア人イスラム教徒が浮船で生活していたし，馴象のため渡来したペルシア人の共同体もアユタヤ城市の郊外にあった．また，マレー人，マカッサル人，インド人，チャム人のイスラム教徒もアユタヤ周辺に住みついたのであって，それはアユタヤにおける民族的多様性を伺わせるものであった。

筆者の行った学術調査は，このように多様性に富むイスラム共同体の来歴と現状を可能な限り明かにし，将来の研究に資するという目的の下に行われたものである。

同時に，所謂タイ・イスラム，すなわち「タイ文化に同化したイスラム教徒」の実態を解明することも目的としたものである。タイのイスラム教徒を概観すると，固有のマレー人としてのエスニック集団を構成し，かつイスラム教の戒律と慣習にしたがっているタイ南部のイスラム教徒，すなわちタイ・マレーと，タイ文化に同化したタイ中部などに住む

イスラム教徒，すなわちタイ・イスラムに分類される．アユタヤやバンコクに居住するイスラム教徒は後者に属するが，その実態についてはほとんど解明されていないというのが実情である．このタイ・イスラムの実態にアユタヤのイスラム社会調査を通してスポットライトを当てたい，というのが調査の他の目的の一つであった。

以上のような観点から，アユタヤ及び周辺に所在する21ヶ所のイスラム共同体について調査を行い，主としてヒアリングによってイスラム共同体の現状を明らかにしたわけである。調査によって析出された問題点は多岐にわたるが，とりあえず本稿では，1)アユタヤのイスラム共同体の発達を時系列的にたどる。具体的にはモスクの成立の時期区分を行い，その上で2)古いイスラム共同体から新しいイスラム共同体が分立する例が見られること，また3)イスラム神秘主義の再生ないし現代版ともいうべき事例が見られることを指摘したいと思う。

## II．アユタヤにおけるイスラム共同体の発達

イスラム共同体がモスクを中心に形成されていることは言うまでもない。信者が構成する社会の中心は，日々の礼拝や金曜礼拝，その他の宗教的祭礼を行う宗教施設モスクである。モスクはアラビア語ではマスジド（Masjid）といい，マスジド・…のごとく正式のモスク名をもっているが，タイでは一般にモスクはスラウ（Surau）とよばれることが多い。

モスクの周辺にイスラム教徒は居住し，現在タイにおいては，タイ政府（内務省，文部省）及びタイ・イスラム中央委員会の統制下に，イスラム教徒はそれぞれ所属するモスクを定めてこれに登録されている。またモスクも，正式にモスクとして登録され，県イスラム委員会，タイ・イスラム中央委員会，タイ政府の管轄下におかれているが，こうした体制が確立されたのは1945年以後のことで，それ以前はイスラム教徒のほぼ完全な自治に委ねられてきたのである。

イスラム社会の中心がモスクである以上，モスクの成立年次が明らかになれば，イスラム共同体成立の年代，またその時系列的発展もほぼ明らかになるということができる。

筆者らの行ったヒアリングを中心に，アユタヤにおけるイスラム共同体の発展を時期区分すると，以下のごとくである。

［第１期］アユタヤ時代

1．Thung Khaek〔Kudi Chao Sen〕（ペルシア系）

2．Khaek Pae（ペルシア系）

3．Masjid Nurul Yaman（ペルシア系，マレー系）

4．Takia〔Masjid Takei Yokin〕（インド系）

5．Surau Nai Klong（チャム系）

6．Kudi Chao Faa（マカッサル人，マレー系）

［第2期］ラタナコーシン王朝初期（ラーマⅠ～ラーマⅢ，1782－1851）

1．Masjid Darul Sunna（ペルシア系）

2．Masjid Nurun Imam Wali Sunna（ペルシア系，マレー系）

3．Masjid Yamarun Islam（マレー系）

3．Masjid Hidayatun Islam（マレー系）

［第3期］近代化時代（ラーマⅣ～ラーマⅤ，1851－1910）

1．Masjid Umma Supuyan（パキスタン系）

2．Masjid Amariya Tut Salifa（チャム系）

3．Masjid Ali〔Alijidaroi〕（マレー系）

4．Masjid Yamarudin（マレー系）

5．Masjid Sunniya（マレー系）

6．Masjid Amariya（マレー系）

7．Masjid Toifa（マレー系）

［第4期］近代（ラーマⅥ～ラーマⅦ，1910－1932）

1．Masjid Yamiun Islam（マレー系）

2．Masjid Shafii（マレー系）

3．Masjid Islam Watana（マレー系）

［第5期］現代（ラーマⅦ～現在，1932－1992）

1．Masjid Nurun Imama（マレー系）

2．Masjid Muhammad Ali（マレー系）

3．Masjid Yanatun Nahim（マレー系）

4．Masjid Yamiun Sunna（マレー系）

以上5期に時期区分されるアユタヤのイスラム共同体の発展について，若干のコメントを行えば，第1期のアユタヤ時代に成立した六つのモスクのうち，現在まで存続しているものは，3．Masjid Nurul Yaman，1610年創建の伝承をもつ4．Masjid Takei Yokin と，6．Kudi Chao Faa である。

他のモスクは消滅したのであるが，1．Kudi Chao Sen は，シェイク・アフマドらペルシア系イスラム教徒によって創建されたアユタヤでは最古のモスクである．シェイク・アフマドの渡来直後の建立であり，1602年創建と考えてよいであろう。Kudi Chao Sen とは「イスラム聖者フセインのモスク」の意であり，現在のアユタヤ教員養成大学運動場

南側にある仏教寺院遺跡 Wat Suan Luang Kan Kao（写真１）の南の土地（Tha-Ka-Ji）に建てられた。そのすぐ南はチャオプラヤ川であり，ここに船つき場と商館が建てられ，香料貿易の拠点であった。イスラム共同墓地は，これに隣接する東北の Thung Khaek に設けられたが，現在，ここにはシェイク・アフマドの聖廟・聖墓（写真２）が建っている。

２．Khaek Pae は，チャオプラヤ川とクロン・マウンが交錯する西北の一帯にあたり，ペルシア系イスラム教徒が浮舟を並べて生活していたといわれ，一般にはフォーラムとよばれていたところである。

３．Masjid Nurul Yaman（写真３）は，このモスクの東方に馴象場の跡（写真４）があり，その西方に所在する。ムハンマド・イブン・イブラヒムの『スレイマンの船』によれば，ナライ王時代，利潤の大きい馴象交易のためアユタヤに移住したペルシア人は，最初30人程度であったが，後に100人程に増えたと記しており，これらペルシア人イスラム教徒によって建立されたモスクといわれている。馴象場はアユタヤ王朝によって1580年に設立されたとのことである。1767年，ビルマ軍によるアユタヤ攻略と共にペルシア人はこの地を去り，ラタナコーシン時代初期，タイ南部から移住してきたマレー系イスラム教徒の子孫が現在は居住している。

４．Masjid Takei Yokin はインドからきたイスラム聖者チャフル・ラヤン（Chahul Layan・イスラム名 Abdula bin Ibrahim）によって1610年に建てられたもので，当初は Masjid Tiki とよばれシーア派であったが，ラタナコーシン王朝ラーマ４世時代，王の保護をうけてスンナ派に転じ，モスクも Masjid Takei Yokin と改称して現在に至っている。ここには，チャフル・ラヤンの聖廟・聖墓（写真５，６）があるが，聖廟内には，ここでイスラムに改宗した仏教僧デヴァンチャ（Dewancha），すなわちプラクーン・タケイ（Prakhun Takei）の聖墓（写真７）もあり，聖墓崇拝が行われている。インド人のイスラム教徒によって設立されたイスラム共同体であるが，現在はマレー系も混住し，モスクのイマームも今はマレー人である。

５．Surau Nai Klong は，カンボジアのコンポントム，コンポンチャムから移住したチャム人イスラム教徒の創建したモスクである。チャム人は義勇軍として1445年には左右両軍に編成されてアユタヤ王朝に仕え，クロム・アサチャム（Krom As-Cham）とよばれた。1767年のアユタヤ王朝滅亡後，チャム人は一旦は難をさけてアユタヤから外に逃れたが，1782年，ラタナコーシン王朝が成立して平和が回復すると，再びアユタヤへ帰るものが出て，旧地にモスクが再建された．同時に，この一帯にはマレー系イスラム教徒も混住するようになり，共同体の人口が増大していった．かくして後述するごとく，このイスラム共同体は第３期～第４期に三つの新しい共同体に分かれ，チャム人イスラム教徒は現

在，マレー系イスラム教徒も混在して，Masjid Amariya Tut Salifa の周囲に居住しているのである。そして，Surau Nai Klong は廃墟と化して（写真８），その一部の遺跡が残在しているだけである。

6．Kudi Chao Faa（写真９）は，アユタヤ時代にマレー系イスラム教徒によって建てられたモスクであるが，1667年，オランダのマカッサル占領により，マカッサル王子や難民が移住してきた．また1686年，イランのサファヴィー王朝の使節の隊員としてムハンマド・イブン・イブラヒムが訪れたモスクでもある．現在はマレー系ムスリムが周囲に集住し，アユタヤでも最大のモスクとされている。

アユタヤ時代に成立した以上のモスクについで，ラタナコーシン王朝初期に秩序が回復すると，アユタヤから一時逃れていたペルシア系ムスリムが再びアユタヤに帰り，第２期に１．Masjid Darul Sunna，２．Masjid Nurun Imam Wali Suna が建立された。またラタナコーシン王朝は1789年，ラーマ１世によるタイ南部パタニ戦役を行い，さらに1832年にはラーマ３世によるタイ南部七州鎮圧戦争が行われ，主としてパタニからマレー人イスラム教徒が戦争捕虜として，また奴隷としてアユタヤにも強制的に移住させられることになった。３．Masjid Yamarun Islam，４．Masjid Hidayatun Islam などは，このようなマレー系イスラム教徒によって創建されたモスクであり，これ以後もマレー系イスラム教徒の移住が進行することになった。

第３期～第５期のモスクは，パキスタン系イスラム教徒のモスク Masjid Umma Supuyan（アユタヤ市内所在）と前述の Masjid Amariya Tut Salifa を除いて，いずれもマレー系イスラム教徒の共同体であるが，これらマレー系イスラム教徒の場合も「祖先がパタニから移住してきた」と答えたものが圧倒的である．いずれにもせよ，アユタヤのマレー系イスラム教徒の起源は，タイ南部からの移住者に求められるのである。

## III．イスラム共同体の拡大及び新しい共同体の分立

かくして，アユタヤのイスラム社会はマレー系イスラム教徒の流入により，その人口が増大し拡大していった。

イスラム共同体の人口増加は，その他の要因も加わって当然ながら新しい共同体の分立を招くことになった。

現地調査によれば，アユタヤ時代に成立したイスラム共同体からのセグレゲーション現象が３例検出された。それを示すと，次のごとくである。

１．Surau Nai Klong → Masjid Amariya Tut Salifa（第３期）
　　→ Masjid Islam Watana（第４期）

→ Masjid Shafii（第4期）

2．Kudi Chao Faa → Masjid Yamiun Islam（第4期）

3．Masjid Nurul Yaman → Masjid Muhammad Ali（第5期）

→ Masjid Yanatun Nahim（第5期）

1．の例は，アユタヤ時代に起源をもつチャム系のイスラム共同体が，ラタナコーシン王朝成立期に再興されたが，その後マレー系イスラム教徒が混住して人口が増大した結果，チャム系を中心にして Masjid Amariya Tut Salifa（写真10）が第3期に建立され，次いで第4期にマレー系イスラム教徒の二つの共同体（Masjid Islam Watana（写真11），Masjid Shafii（写真12））が成立したケースである（図3）。新しい共同体の分立要因は，ここでは人口増加に求められる。

2．の例は，同じくアユタヤ時代に成立した Kudi Chao Faa から Masjid Yamiun Islam が第4期に分立したものであるが，後者のモスクのイマームの説明によれば，「宗教実践の違い」からとのことであった．しかし具体的にはターリカ，すなわちイスラム神秘主義を信奉しているが故の分立であり，次節において触れたいと思う。

3．の例は，同じくアユタヤ時代に起源をもつ Masjid Nurul Yaman から，二つのイスラム共同体が分立したケースである。最初に分立したのは Masjid Muhammad Ali（写

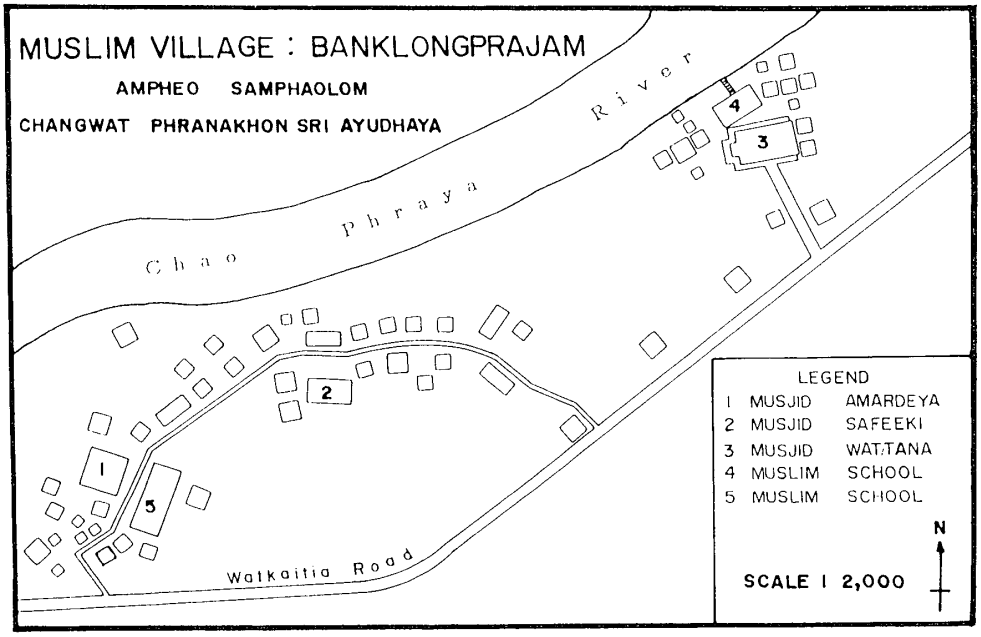



図3　Masjid Nai Klong から分立した3イスラム共同体

真13）であるが，これは人口増大に加えて宗教実践，例えばモスクで礼拝するときの姿勢などをスンナに正しく合致させるべきだとして，ムハンマド・アリが中心になって新しいイスラム共同体をおこしたものである．もちろん分立はしたが，Masjid Nurul Yaman のイスラム教徒とは血縁関係にあり，相互に関係はもってはいる。しかし，新しいイスラム共同体の成立にふみ切ったものである。

Masjid Yanatun Nahim（写真14）も Masjid Nurul Yaman から分立したものであるが，これは後者の人口増大に加えて，アユタヤの商業の中心である市場（Huaro Market）に近いクロン・サブア地区にモスクを建てて移住し，野菜や鶏肉などの商売を行っていることから，商業上の理由によるものということができよう。

以上要するに，1．共同体人口の増大，2．商業的経済的理由，3．宗教及び宗教実践の相違から，古いイスラム共同体から新しい共同体の分立がおこっているのである。

## IV．イスラム神秘主義の再生

今回の現地調査で注目をひいたのは，イスラム神秘主義の再生ないし現代版ともよぶべきモスクが存在していたことである。

イスラム神秘主義はスーフィズム（Sufism）とよばれ，苦業と禁欲生活を送るスーフィー聖者が，タリーカ（Tariqa）とよばれる教団を組織し，そのタリーカのネットワークを通して民衆レベルのイスラム化を推進したことに特色をもっている。

東南アジアでは13世紀以後のイスラム化の過程を通して，ワリ（Wali）やシェイク（Sheikh）とよばれるイスラム聖者による布教が行われた。例えば15世紀後半から16世紀にかけてジャワ島で活躍し，ジャワ最初のイスラム教団デマック王国の成立に貢献したワリ・サンガ（Wali Sanga）が有名である。タイにおいても，特に南部においてはイスラム聖者による布教が行われたものと推定されるが，タイ中部や北部のイスラム社会ではほとんどその痕跡を残していないというのが実情である。

しかし全く痕跡がないというのではなく，アユタヤについては，前述の1610年，インド人聖者チャフル・ラヤンによって創設されたモスク Masjid Tiki こと，現在の Masjid Takei Yokin の場合，ここではチャフル・ラヤンの聖墓を，聖廟を建てて祀り，崇拝している．聖墓は廟の中央に部屋を設けて安置されているが，その横にはもと仏教僧で，イスラム教義との論争に負けて改宗したデヴァンチャ，すなわちプラクーン・タケイの聖墓もあり，同じく崇拝の対象となっている。

チャフル・ラヤンの墓には華麗な布がかけられ，数珠や枕が置かれ，イスラムの聖典『コーラン』も積まれている。墓の上には南国の色鮮やかな花々や花輪が飾られ，蠟燭の

灯がともされ線香が一日中たかれ，次々と人々が参詣する。プラクーン・タケイの墓はさほど大きくはないが，チャフル・ラヤンの墓を取りまく回廊の左手にあり，美しい布がかけられ，花や数珠で飾られ，これにも蠟燭と線香を絶やさない．参拝者も多い。

イスラム神秘主義はこの聖墓崇拝，聖廟崇拝を大きな特色とする．瞑想と苦業によって「神人合一」の境地に達した聖者はワリとよばれ，神アッラーと同等の地位に立つものとされた．聖者は神の恩恵の印として，神からバラカ（Baraka），つまり超人間的力をあたえられる。バラカよって聖者は様々な奇蹟を行いながら，人々をイスラムへと改宗させる。東南アジアでイスラム布教に貢献した聖者たちの伝記は，奇蹟の物語で埋められている。

そして聖者の死後も，このバカラはその墓や廟に残り，そのバカラにあやかるため聖墓崇拝・聖廟崇拝が行われた。子供の成育を願う母親，病を身にもつもの，旅行の安全を願うものなど，多くの信者がこれを崇拝し願かけをする。また，そのときには，人々は聖墓の周りで『コーラン』の章句を読誦したり，ジクル（dhikr），すなわち神の名号を唱える唱名をくりかえすのである。

ともあれ，アユタヤでも最古のモスクに属する Masjid Takei Yokin ではチャフル・ラヤンを聖者，すなわちフーソン（Huson）として崇拝し，廟中央に廟中の廟とでもいうべき祠を建てて墓に祀っている．また，イスラムに改宗したかつての仏教僧，プラクーン・タケイ，すなわちデバンチャも廟中に祀っているのである。

そして本来，チャフル・ラヤンによって創始されたこのモスクは，インド系のシーア派のモスクであった．シーア派では周知のごとく，ムハンマドにさかのぼり，その血統をひく特定の人物が指導者として重要視され，その人物及び後継者によるイスラム法の解釈によってシャリーアが守られ，イスラム共同体が保持されていくのを大きな特色としている．しかし前述のごとく，このモスクはラーマ４世の保護をうけることになり，シーア派からスンナ派へと転じた。

イスラムにおける宗教の転換はきわめて重要な意味をもち，簡単には行われないとするのが一般的見解であるが，タイにおいては明確な理由はないが，圧倒的に優勢な仏教徒社会の中にあって，仏教徒ではあるが諸宗教の保護者でもある国王の支援と保護を受けることにより，シーア派から穏健なスンナ派へと転じたわけである。またラーマ１世及び３世によるタイ南部鎮圧戦争により，多数のマレー系イスラム教徒がアユタヤにも強制的に移住させられ，Masjid Tiki の共同体の中にも多数混住することにより，スンナ派イスラム教徒が多数を占めるという状況も生まれてきていたと推定される。

ところで今回の現地調査においては，これ以外に二つのモスクを中心としたイスラム共同体で，聖廟・聖墓崇拝が行われていて注目された。筆者はこれを「イスラム神秘主義の

再生」ないし新イスラム神秘主義と考えている。

その一つは，第4期にKudi Chao Faaから分立したMasjid Yamiun Islam（写真15）である。現在のイマームはマット・ブレ（Mat Bre，48歳）であるが，アユタヤ時代創建のKudi Chao Faaから分立した理由を，最初は「宗教実践の違い」によるものと答えていたが，宗教実践の相違について再三質問を続けた結果，それが「タレッカト」によるものであることが明らかになった。タレカット（Tarekat）はアラビアのタリーカのことで，マレー・イスラム世界ではタレカットとなまっている。すなわちそれは，イスラム神秘主義教団のことである。

そして自らはカーディリー教団を継承していること，また祖父及び父をイマームとしてその墓を聖廟内に祀って崇拝し，かつイマーム自身はその継承者を以て任じていることが明らかになった。筆者がヒアリングを行ったイマーム宅には，二階の一室の入口右側に，ムハンマドにさかのぼるイマーム一族の系図が掲げられ，父マット・ムッラー，祖父マット・ムッラーの肖像画が掲げられている。加えて自らがスンナの服装で立つ全身像を画いた肖像画（油画の大きさにして100号F（162.2×130.3cm）くらい）が左側壁面（写真16）に飾られていて，イマームとしてモスクを主宰すると同時に，タレカットの教えを遵守してきていることを強調された。

祖父・父を祀る聖廟（写真17）はモスクの裏手の共同墓地の一角に立っているが，建築様式はMasjid Takei Yokinにあるチャフル・ラヤンの聖廟と同じく，円形の屋根をもつ方型のもので，その中に墓があり，聖墓として特殊な扱いを受けているのである。

なお，調査当日はヒジュラ暦1月10日，つまりアーシュラー（Ashura）の日に当たったが，午後3時からモスクに集まったイスラム教徒に対して，この祭りを記念するために作った特殊な菓子アーシューローがふるまわれた。果物なども出され，モスクでは礼拝が行われる。アーシューローが，アーシューラーから転じたことは疑いないが，この菓子を作ってアーシューラーの祭を祝うことは，ひろくタイのマレー系ムスリム社会で行われているようである。チャム系イスラム共同体のイマームのナロウ氏（イスラム名はAbdul Kalim）宅でも，このアーシューローをふるまわれた。

さて，「イスラム神秘主義の再生」と規定しうる他の一つのモスクは，アユタヤ市の北郊プーカオトン所在の Masjid Ali（写真18）である。このモスクは第3期に成立したものであるが，イスラム教徒はマレー系である。

筆者はこのモスク所属のイスラム学校で教師ナロン・ポンサワカー氏（イスラム名Shafii）と，教師でありモスク委員会委員でもあるタウィサック氏（イスラム名 Muhammad Kowi）と面談したが，本地区のムスリム住民は約1000人，祖先はパタニからの移住

者であるという。モスク建設はラーマ５世時代と推定され，スンナ派に属しているとのことであるが，「真のイスラム指導者」としてシェイク・ムハンマド・アリ（Sheikh Muhammad Ali，？～1932）を崇拝し，その聖廟・聖墓（写真19）がモスクの横に建てられている。

そして，このシェイク・ムハンマド・アリを崇拝し，彼を偲ぶホーン（Hon）とよばれる特別の祭りが毎年命日に行われ，この日は同じくモスクの境内にあるステージのある建物で，演劇が奉納される。しかし，奉納される演劇は，通俗的なタイのロマンス物語で，イスラム的な劇，例えばムハンマドの生誕の物語りスラウォタンのようなものではなく，タイ文化に同化したマレー系住民の娯楽を兼ねた出し物となっている。

シェイク・ムハンマド・アリを聖者として崇拝するこのモスクは，タキエンにある Masjid Takei Yokin と強い関係で結ばれ，チャフル・ラヤンの聖者祭りの日には，住民の多くはチャオプラヤ川を舟でくだって Masjid Takei Yokin を訪れて祭りに参加する。そして，チャフル・ラヤンの聖廟に詣でてジクルを行い，聖墓崇拝を行うが，人々は彼のことを「いかなることも出来ないことがなかった聖者」，すなわちフーソンとよんでいるのである。

以上のように，Masjid Yamiun Islam と Masjid Ali に見られるイスラム教は，イスラム教の二大宗派とされるスンナ派やシーア派とは異なり，明らかにイスラム神秘主義と規定できるものである。

スンナ派を主流とするマレー系イスラム教徒社会のなかに，イスラム神秘主義を標榜するこのような新しいモスクとそのイスラム共同体が出現していることは，注目されて然るべきであろう。それは新スーフィズム（New Sufism）とよぶことのできるものである。

## V．おわりに

アユタヤのイスラム共同体の発展については，その他言及しなければならない事実が多々あるが，本稿では現地調査のヒアリング結果に基づいて，モスク，またイスラム共同体の成立と発展を５期に分けて時系列的に考察し，その上で，アユタヤのイスラム社会を特徴づける二つの現象のみを指摘した。

その一つは，共同体の人口増加，経済上の理由，宗教及び宗教実践の相異などによる，古いイスラム共同体から新しいイスラム共同体が分立する現象である。これは決してアユタヤのイスラム社会のみに見られる現象ではなく，広くイスラム社会全体に見られるものであるが，タイにおいては今回の現地調査で初めて確認されたものである。セグレゲーションの現象の具体例といえよう。

他の一つは，イスラム神秘主義の残滓とイスラム神秘主義再生の現象である。前者は，シーア派からスンナ派へ改宗した後も，聖者チャフル・ラヤンの聖墓崇拝などを現在に伝えているMasjid Takei Yokinであり，後者はMasjid Yamiun IslamとMasjid Aliに見られるように，特定のイスラム教徒を聖者として崇拝し，聖廟・聖墓に祀って崇拝するものである。そこには，明らかに自らの所属するのタリーカ（タレカット）の存在を主張し，旧イスラム共同体から分立したMasjid Yamiun Islamのごとき存在もある。これらは，新イスラム神秘主義，あるいはイスラム神秘主義の再生と規定しうるものである。

ここには，明らかにタイ中部イスラムの多様な在り方が看取されるのであり，今後とも現地調査を継続することによって，タイはもちろんのこと，広く東南アジアの各地に根ざした多様なイスラムの実態を明らかにしていくことが必要であろう。

## 文　献


アユタヤ歴史研究センター（1990）：『IUDEA』130P.

石井米雄（1992）：〈港市国家〉としてのアユタヤ．石井米雄・辛島　昇・和田久徳編著『東南アジア世界の歴史的位相』東京大学出版会，pp. 75－91.

今永清二（1992）：アユタヤのムスリム居住区．『事典　イスラームの都市性』亜紀書房，p. 573.

今永清二（1992）：『東方のイスラム』風響社，254P.

今永清二（1992）：タイ・イスラムの源流．広島大学東洋史研究室報告，第14号，pp. 44－48.

Griswold, A.B. and Prasert na Nagara (1971): Epigraphic and Historical Studies. No. 9; the Inscription of King Rama Gamhen of Sukhodaya (AD. 1292). *Journal of the Siam Society*, 59 (2) pp. 200-213.

Muhammad ibn Ibrahim (1972): *The Ship of Sulaiman, tr. John O'kane.* Persian Heritage Series, No. 11, London, Routledge and Kegan Paul, 249p.

Kukrit Pramoj, M.R. (1968): *A History of Muslims in Thailand* (in Thai). Aksornsarm Press, 110p.

Parmu, R.K. (1969): *A History of Muslim Role in Kashimir 1320-1819.* Delhi, People's Publishing House,155p.

Plubplung Kongcana (1992): *The Historical Development of Muslim Communities in Ayutthaya District.* Ayatthaya (in Thai), Ayutthaya Historical Study Center, 150p.

Ringis, R. (1990): *Thai Temples and Temple Murals.* Oxford University Press, 163p.

Scupin, R. (1980): Islam in Thailand before the Bangkok Period. *Journal of the Siam Society*, 68 (1), pp.55-71.

The History of Prakhun Takei and Takei Yokin Rachmisjinja Siam Mosque (in Thai) (1988): 24p.

Tibbets, G.R. (1957): Early Muslim Traders in Southeast Asia. *Journal of the Malaysian Branch of the Royal Asiatic Society*, 30 (1), pp.1-45.

Wyatt, D. (1974): A Persian Mission to Siam in the Reign of King Narai. *Journal of the Siam Society*, 62 (1), pp.131-155.

写真 1　Wat Suan Luang kan kao の遺蹟

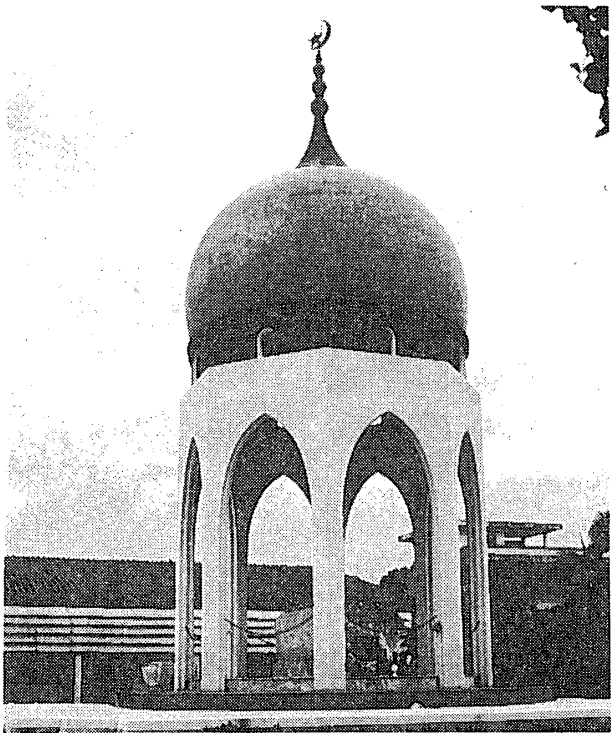


写真 2　Sheik Ahmad（？～1659）の聖廟・聖墓

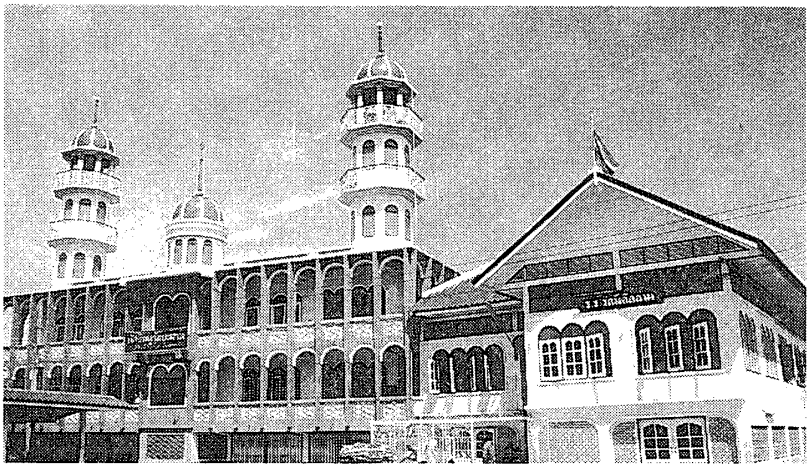


写真 3　Maslid Nurul Yaman

写真 4　馴象場跡

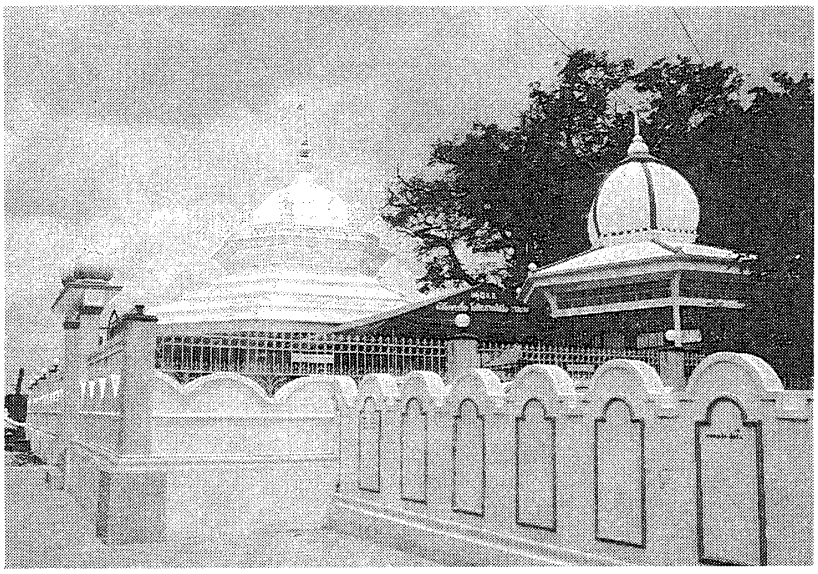


写真 5　Maslid Takei Yokin の Chahul　Layan の聖廟

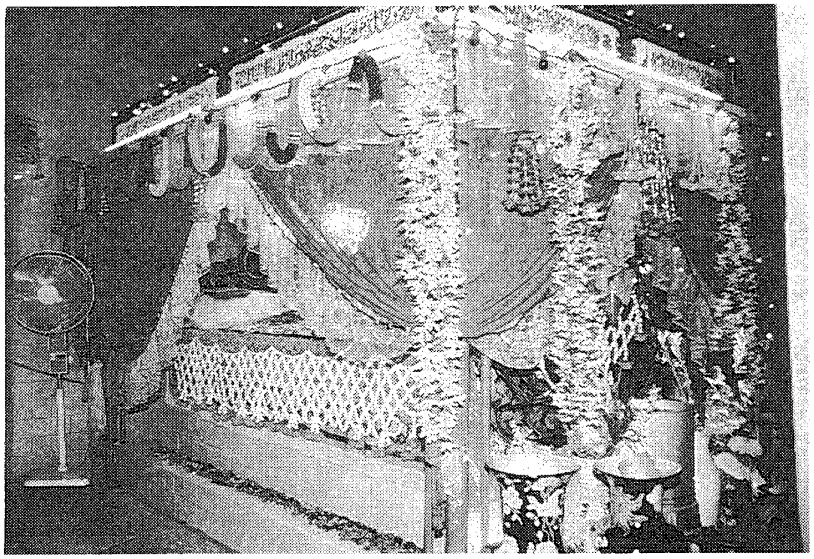


写真 6　Chahul　Layan の聖墓

写真 7 Prakhun Takei の聖墓

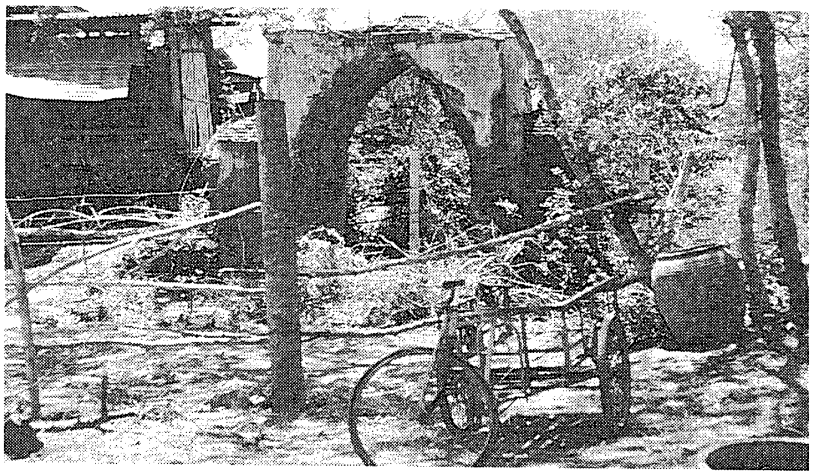


写真 8 Surau Nai Klong の遺蹟

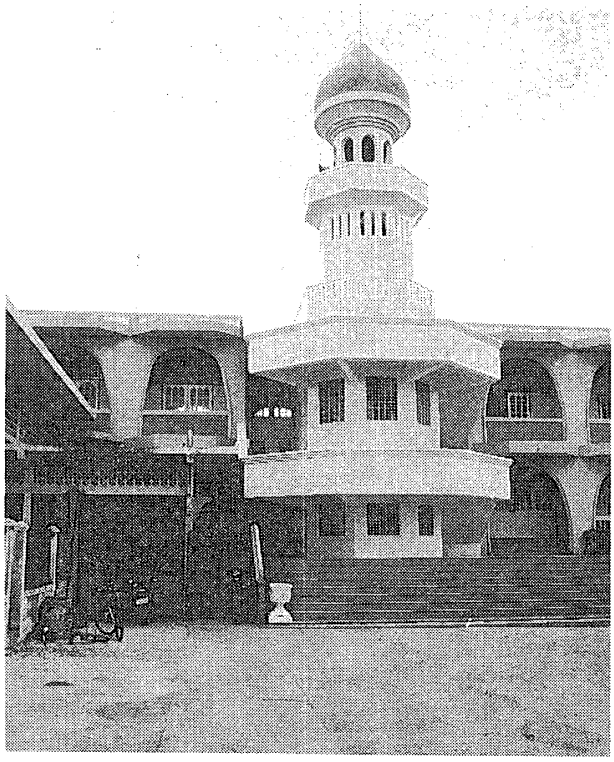


写真 9 Kudi Chao Faa

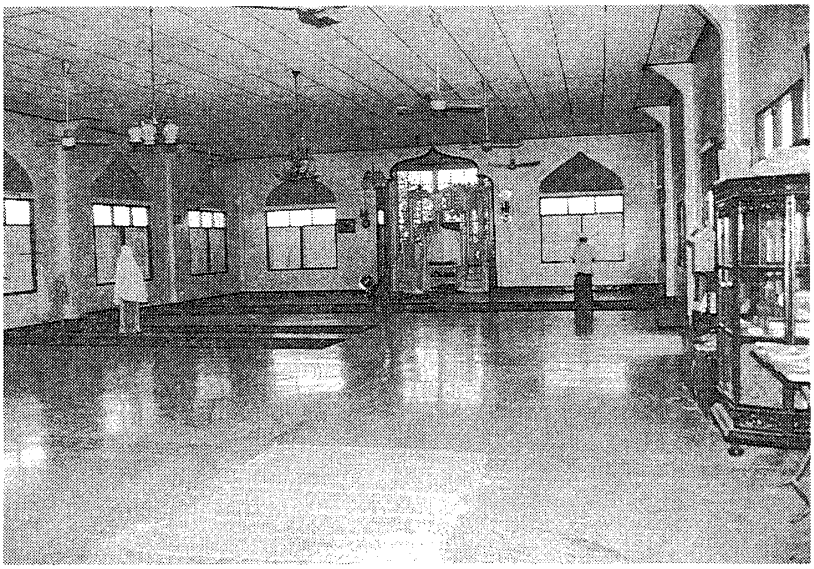


写真10 Masjid Amariya Tut Salifa のモスク内部

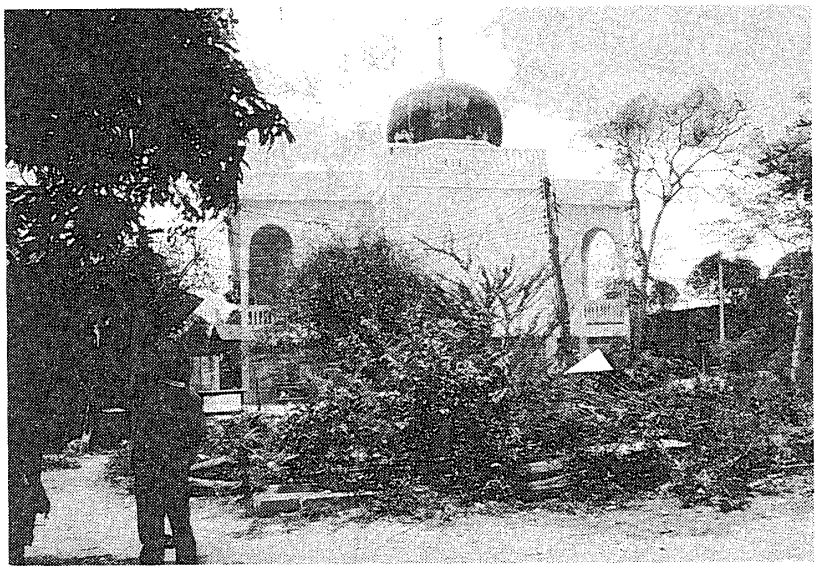


写真11 Masjid Islam Watana

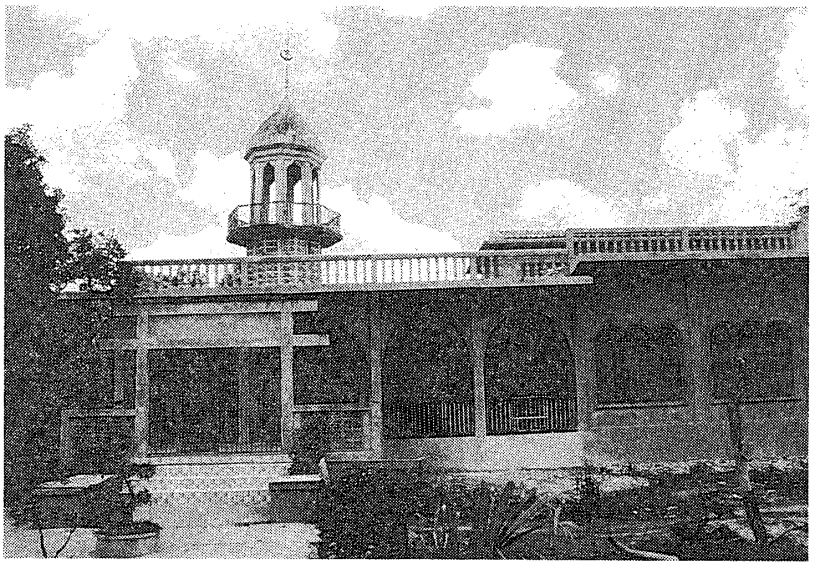


写真12 Masjid Shafii

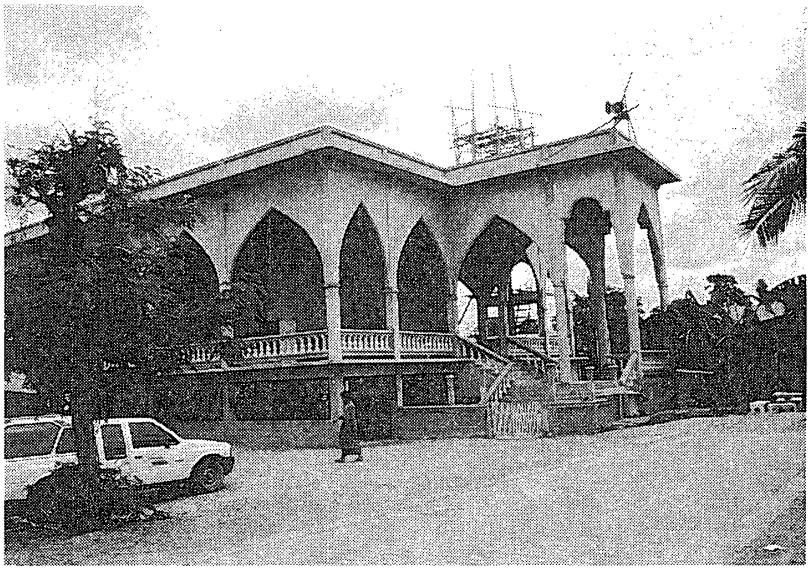


写真13 Masjid Muhammad Ali

写真14 Masjid Yanatun Nahim

写真15 Masjid Yamiun Islam（左後方に聖廟の屋根が見える）

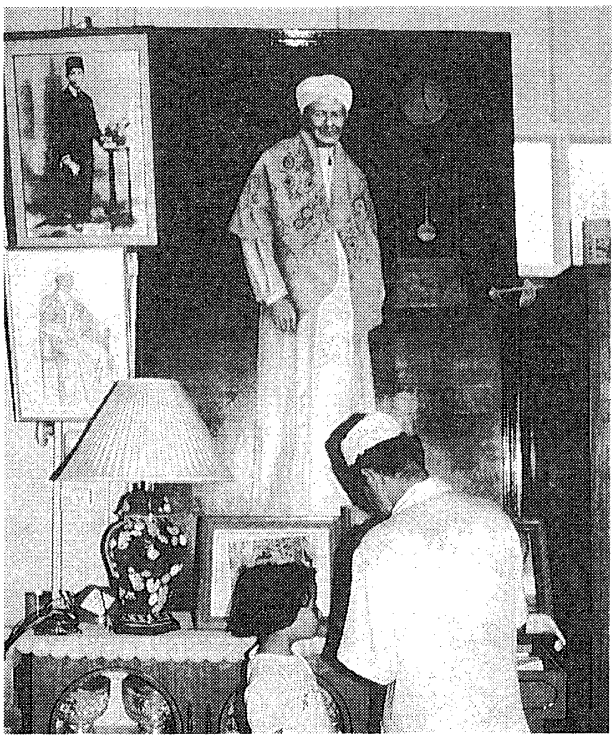


写真16 イマーム Mat Bre 氏とその肖像画

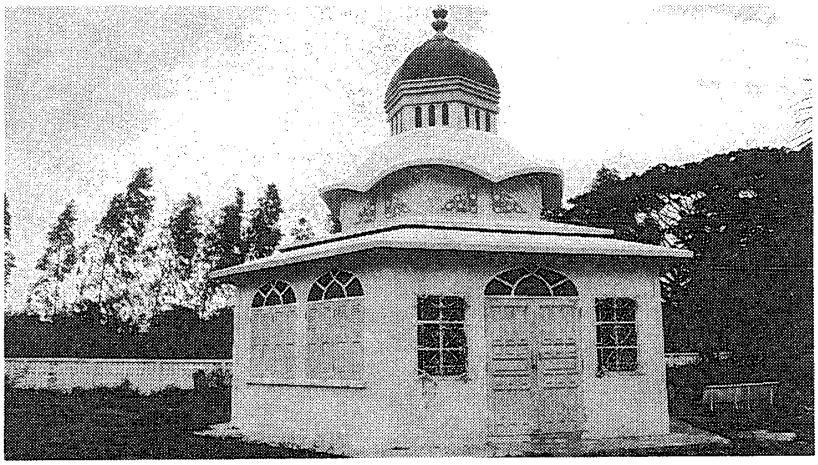


写真17 イマームの祖父及び父を祀る聖廟

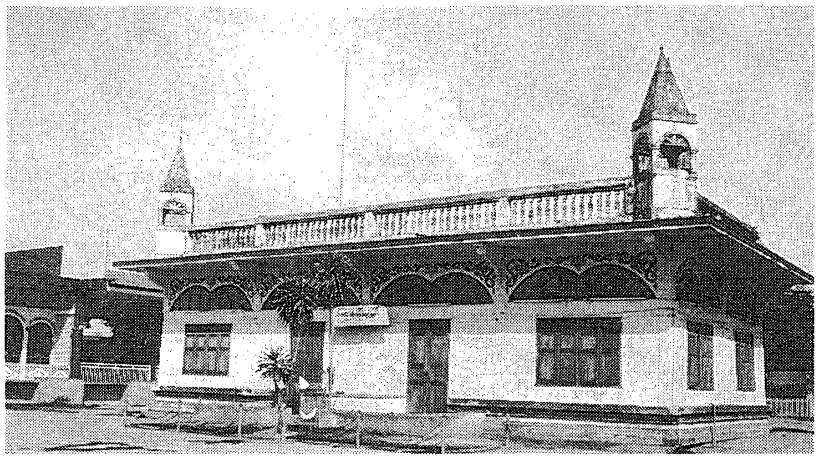


写真18 Masjid Ali

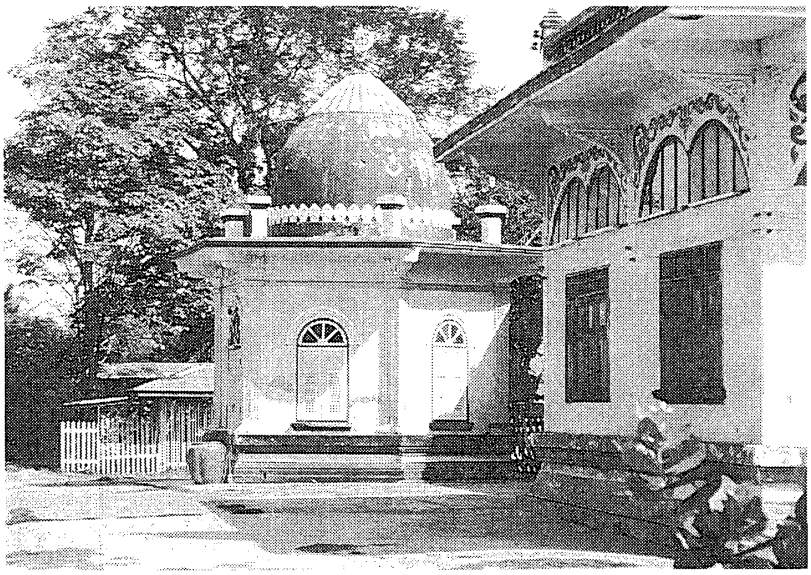


写真19 Muhammad Ali の聖廟（モスクの左後方に建てられている）